

**民間フットサル施設の経営に関する研究**  
**立地に着目して—**  
**A Study on Management of Commercial Futsal Facilities**  
**aim at the Location—**

1K06B187

指導教員 主査 間野義之先生

二見洋平

副査 作野誠一先生

【緒言】

フットサルは、欧州では「インドアサッカー」、南米では「サロンフットボール」と呼ばれて発展してきた室内サッカーを基盤として発展を遂げてきた。アジアでは、イランが最もフットサルの環境が整備されているといわれており、街中のいたるところでフットサルを楽しむことができる。日本でも、フットサルの普及にともない競技人口も年々増加してきており、実際のフットサルプレイヤーは、推定250万人とされている。また、ふとサルの競技スポーツ的側面としては、全国リーグが2007年にフリーグ(日本フットサルリーグ)が開幕し、将来的には16チームにまで拡大したいとしている。日本においてフットサルは大きな発展を遂げてきたが、その中で大きな役割を果たしているのが民間フットサル施設である。フットサルは、プレイヤーがプレイヤーを生み、育てていくことで、コミュニティを育んでいくという特徴があり、民間フットサル施設はその拠点としての機能を果たしてきた。そこで本研究は、研究の目的を以下のように設定した。

現在の民間フットサル施設業界の環境を、記述すること。

立地別にみた民間フットサル施設において、経営成果を高める

ために有効な戦略を明らかにすること

【研究の方法】

文献研究を行うことで、現在の民間フットサル施設業界の環境の記述と、立地別にみた民間フ

ットサル施設において、経営成果を高めるために有効な戦略を明らかにすることを行った。特に、立地別フットサル施設特性に関しては、コート稼働率と競争戦略に着目して述べた。

【結果】

1994年に千葉県昭南町に町営のフットサルコートが開設された。以降2008年3月まで順調に施設数を増やしている。本来、フットサルは屋内競技であるが、日本では、人工芝を使った屋外施設をきっかけに急速な開発が進み、差別化の観点からさまざまな立地や業態をとる民間フットサル施設が出現した。本研究では、施設の立地を 中心市街地型 郊外都心型 独立立地型に分類した。

民間フットサル施設の稼働率については以下のことが明らかになった。

施設によらず高い稼働率を維持できているのは、平日夜間だけである。

平日夜間とは対照的に平日日中は全体的に低い稼働率を示した。

一般的に顧客の休日である土曜日、日曜日、祝日では平日日中に比べるとその稼働率にはばらつきがあり、施設によって差が現れる。また、どの立地における稼働率についても、中心市街地型 > 郊外都心型 独立立地型の傾向があることがわかった。

【考察】

立地は、各々の民間フットサル施設の性格を決定する中で、変えることのできないものである。

しかし、今回は、3つのタイプに分けたが、各タイプの中でも異なる性質を持つ施設が存在すると予想される。地域の文化なども民間フットサル施設の性格に影響を及ぼすだろう。3つのタイプを基本とし、各々の施設の立地条件に応じた施設経営を行うことが重要になる。また、今後、民間フットサル施設は、他施設との競争を意識した経営は避けて通れない道であると予想される。多様化していく顧客のニーズに応え、他施設との競合に生き残っていくには、まず各施設の性格を明らかにしておく必要があると考える。